
1 年間

たかし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1年間

【Nコード】

N5789A

【作者名】

たかし

【あらすじ】

時わ未来。全てが想像を絶し、あらゆるものを超越する。果たして明るい未来を訪れるのか…

1、始まり

時わ5326年。

2000年代から急激に発展してきた世界わ4000年代になり絶頂期を迎え、現在、下降を始めている。

3952年、地球温暖化を食い止め、しかも冷却効果のあるマシンが出来上がった。しかし、それわ世界最大の発明であり、2つとして作れないものであった。

いつか故障するのでは…。

そうやって恐れられていた。

そして恐怖わ現実になる。

2、始まりの合図

5325年の昼下がり。俺わ素晴らしい午後を満喫していた。
あの悪夢が始まるまで…。

俺の名前わトシ。俺の先祖わ地球温暖化を防止する機械を発明した。
と言われている。しかしそれわ誇りと自信を持たせるため、どこの
家庭でも言われていることだった。

「トシ！あのマシンが壊れたらしいぞ！」

こいつわ幼なじみのマサだ。

「マジか！行くしかねえな！」

マシンがある場所わ昔の奥多摩があつた場所。

世界で5本の指に入るほど危険な場所になっている。

今日本わ県わ全て廃止され1つになっている。

スカイカーに乗り遠くの空から見下ろしてみるともうもうと煙を吹
き出している。

近年まれにみる規模だ。

温室効果が薄くなりオゾン層も全て無くなった今、それを支えるの
わ日本なのだ。

それが今煙をあげている。

「マサ！これからこれどうなるんだろうな？」

「前故障した時わたしか地下セルに2カ月入りっぱなしだもんなあ
…」

その瞬間、煙の下から炎が巻き起こり空を覆っていた膜が消えた。
これわ危ない。

オゾン層が無いということわ太陽からの紫外線が直に大地に注ぎ想
像を絶する速さで気温が上昇する。

その炎わ全人類破滅へのカウントダウンを予感させるものであつた。

「おいおい…マジかよ…」

「戻ろうぜ…」

そうしてトシの家に戻った。

帰るとすぐ警報が発令された。

いつも通りサングラスをかけ、対紫外線コートを羽織る。しかし、太陽からの直接の熱によりみるみるうちに気温が上昇していきコートを着るのが嫌になるくらいだった。

3、足音

コートを脱ぎ去ると多少わ楽になった。今日わいつもと違う。そんな空気だ。

張り詰めた雰囲気の中警報が鳴り響く。

「すぐにセルに逃げて下さい！繰り返します。すぐにセルに逃げて下さい！」

以前よりも緊迫している。

しかし、トシわ動かなかった。いや…動けなかったというのが正解だろう。

「おいトシ…トシ！急げよトシ！」

マサの叫びわトシの耳に全く入っていない。

不意にトシわ立ち上がり、外へ出た。

「トシ！死ぬぞ！行くな！」

追いかけようとするが半分地獄と化した外へ出ると思うと足が動かない。

外へ出たトシわ人影が全く無い通りを何か目指して歩いている。

今のトシわ自分の意志で動いていない。目わ焦点が合っていないし足取りわ危うい。

しかし、1歩1歩、確実に何かに向かいつつある。

空わ明るくなっている。

雲わ全く無い。

レーザーのような太陽光線が大地を照らしている。

さつきまで青々と茂っていた木わ秋のように枯れつくしている。水わ干上がり、ひび割れている。

1時間も経つたろうか…トシわなぜか奥多摩にいた。

そこで意識が戻った。「あれ？なんでここにいるんだ…。」

トシわ嫌な感覚に襲われた。

何かとてつもない事が起こる。

根拠もない。ましてや過程もわからない。しかし絶対何かある。そう信じて疑わなかった。

今日の前で起こっているのわ現実。

建物わ半分焼けていてもはや修復不可能な状態だ。

人影も無い。

恐れをなしてセルに逃げ込んだのだろう。

トシわ考えた。

このままセルにいても食料わ底を付き、餓死し、全人類わ破滅へと向かうだろう。それも時間の問題だ。

それなら、この危機的状況で多少生き延びて、やり遂げてから死ぬか…と。

しかしそれわ全人類誰もが経験をしたことが無い先の見えない戦いになることわ知る由もない。

4、戦い

トシは燃え盛る建物の中へ入った。不思議と暑くない。外から見ると全く分らなかったが中はほとんど壊れている。

そういえばこの巨大なマシンを動かすために二ト口を使っていると聞いたことがある。

おそらく最深部にあるのだろうか危険なことに変わりはない。

人の気配は無い。

しかし何か生物の気配はある。

本能的にわかった。今までこうゆうことは無かった。しかし今わ物凄いやえている感覚だ。

注意散漫な俺も今怖いほど集中できる。…来た！

特殊な研究でもされていたのか、強力な牙を持っている犬のような動物が来た。トシは負ける来がしなかった。雰囲気で敵を圧倒すると怯えて逃げてしまった。やはりここわ奥地ということで極秘に研究がされていたのだ。そこでトシわ人の声を聞いた。

「うう…痛い…誰か…」

「はっ！誰かいるのか！？」

トシわ急いで声がする方へ走った。

「おい！大丈夫か！？」

「誰か…いるのか？頼む…助けくれ…み…水を…」

「水か！ちよつと待ってる！探してくるからな！」

そう言うとすぐに走り出した。

誰かのためにこんなに一生懸命になるなんて初めてだ。かすかに水が残ってた。

自分も喉を少し潤すとすぐに走っていった。

「おっさん！持ってきたぞ！」

「おお…助かる…少し起こしてくれ。」

どうやら自力では動けないようだ。

「うつ…はあ…美味い…」

「何が起こったんだ？」

「いきなり、漆黒の闇と名乗る集団が乗り込んできて…人質に取り、機械を壊し始めた…まだ…多少中にいるはずだ…」

今トシははつきりした。

これが壊れたのは故障でもなんでもない。テロリストが破壊したのだと。

でもなぜ…。

「ありがとうな。俺はもう無理かもしれん…なんとかしてカタキを取ってくれ…そうすれば…殺された職員も浮かばれるだろう…」

「おっさん！おっさん！おい！おい！」

もう絶命していた。最期の最期にとても安らかな顔をしている。

トシは部屋の隅まで運び、布をかけて祈りを捧げた。

そして、その部屋に誰も入れないように入り口を塞ぎ、又祈りを捧げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5789a/>

1年間

2010年11月14日15時02分発行